

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 2 日現在

機関番号：14301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26670980

研究課題名(和文) 妊娠期から産後3カ月までの女性とパートナーのための育児支援プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of the child care support program for couples from the pregnancy period to the child care period

研究代表者

我部山 キヨ子 (KABEYAMA, Kiyoko)

京都大学・医学研究科・教授

研究者番号：20243082

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：目的：妊娠時から子育て期の夫婦の心の変化を視覚的にとらえ、妊娠期から子育て期にある夫婦への支援を検討する。方法：ライフライン・インタビュー法(LIM)を用いた個別的・半構造化面接。倫理承認を得た。対象：生後1歳までの子どもを持つ夫婦8組。結果：妊娠の判明やつわり、家族の死亡、引っ越しでは、夫婦の心の変化が一致。母親は自身の身体的変化、胎児や子供に関する事柄やこれに伴う心の変化が、父親は仕事に関とこれに伴う心の変化が描写され、夫婦の心の変化は不対応であった。結論：夫婦が子どもを育てるといふ共通の目的に向かいながらも、異なる思いを抱くということが、当事者の主観的体験の結果として視覚的に証明された。

研究成果の概要(英文)：We modified the Life-line Interview Method for use in pregnant women and mothers rearing children to understand their continuous mental condition changes and significant events affecting such changes. Methods: Individual interviews were conducted with 15 mothers with children between ages 12 months. The events were then categorized by gestational week and mental status. Results: Although participants drew a variety of lifelines, similar patterns were observed in branching events, such as detection of pregnancy, pleasant season, and completion of childbirth at the rising point, and morning sickness, bewilderment of a newborn's care, concern for the elder child (in multigravida) at the declining point. Conclusions: Understanding the events leading to negative mental condition might help provide preventive and immediate care for women. Our modified LIM can be a powerful tool in understanding women's life experience during the perinatal period.

研究分野：助産学

キーワード：育児支援 ライフライン・インタビュー法 子育て期の夫婦

1. 研究開始当初の背景

周産期からの母子へのメンタルヘルスの支援策を考える場合、妊娠期は産後よりもうつ病の出現率が高い可能性があることや、妊娠期のうつ病が産後の抑うつ傾向のリスク要因になることを示唆する研究 (Gotlib ら, 1989) もあり、早期介入という視点からも、妊娠期の女性の抑うつ傾向に注目する必要がある (Sugawara ら, 1999; Honjo ら, 2003)。また、妊娠・産後のメンタルヘルスに関する研究は、これまでは母親に焦点が当てられてきたために、パートナーである父親の精神病理を扱った研究は稀であるが、妊娠中の女性のパートナーである男性のうつ病の出現率は、諸外国では女性と同程度とも報告されている (Buist ら, 2003)。国内の夫を対象とする調査では、児の性別を知ることや周囲からの「父親になるのか」という励ましが父親になる決意を促すという報告 (手邊ら, 2011) があるが、質的研究がほとんどで、夫を対象とした研究は極めて少なく、特に夫の抑うつを扱った論文は見当たらない。妊娠期における女性、パートナーの抑うつ傾向は、胎児・子どもへの愛着形成のリスク要因であるため、妊娠期における女性・パートナーの抑うつ傾向、胎児・子どもへの愛着に関する研究は、後の子どもの心身の発達や急増している虐待予防に対する対策としても極めて重要である。

2. 研究の目的

本研究は妊娠中から産後までの女性とパートナーの抑うつ度、愛着度、ストレス対処能力、夫婦関係の調査を行い、女性とパートナーが求めているケア内容を明らかにし、それを基に育児支援プログラムを作成し、ハイリスク・ローリスク妊婦とパートナーを対象にした妊娠期から産後3カ月までの育児支援プログラムを開発する。また、最近増加傾向にある社会的ハイリスク妊産褥婦を対象に

含め、その特性を明らかにする。

目的1: 妊娠期から産後1年までの女性とそのパートナーのライフイベントに対する心理的受け止めに調査する。

目的2: 社会的ハイリスク群の妊産褥婦の psychological distress・ストレスホルモン・親となる発達との関連を、背景因子やパートナーとの関係性を踏まえて、明らかにする。

目的3: 妊娠・出産・育児に関するIT環境における妊婦および母親の情報収集の現状を明らかにし、妊娠・出産・育児における情報提供ツールとしてのインタ-ネットやアプリケーションの活用方法を検討する。

3. 研究の方法

目的1: ライフライン・インタビュー法 (Life-line Interview Method: LIM) とは量的・質的方法を組み合わせた半構造化インタビューで、横軸に時間、縦軸に情動のプラス・マイナスを記した用紙にインタビュー参加者が主観的ライフラインを描き、分岐点でのイベントについて語る面接技法である (Assink & Schroots, 2010)。自己構造的なラインにより人生における過去のイベント・経験や今後の期待への自己認識を明確にする方法であるが、LIMによる周産期の調査はこれまでに見当たらない。本研究の目的は、LIMにより妊娠時から子育て期に至る夫婦の心の変化を視覚的にとらえてライフラインやイベントの特徴を把握し、これらを踏まえて妊娠期から子育て期にある夫婦への支援を考察することである。方法: 研究デザインはLIMを用いた個別的・半構造化インタビュー法で、実施期間は2014年8~10月、倫理承認(京都大学・医の倫理委員会)を得て実施した。対象は、出生体重2,500g以上の単胎・正期産児をもうけ、生後1歳

までの子どもを持つ母親と父親である。参加者には事前にインタビューの目的や方法を説明して参加の同意を得、プライバシーが確保される個室で夫婦別にインタビューを行い、最終月経初日から児の1歳の誕生日までの心の変化をラインで描写してもらった。相方が描いたラインは閲覧し合えないこととした。インタビュー時には、研究者がラインの分岐点でのイベントを本人に確認しながら用紙に記入し、後程ICレコーダーで録音したインタビュー内容を基に、別の研究者がイベント内容を再確認した。

目的2：対象は京都市の入院助産制度対象施設の単胎妊婦とそのパートナー59名(社会的ハイリスク妊産褥婦30名、ローリスク妊産褥婦29名)である。研究デザイン-縦断研究・コホート研究・質問紙調査。調査項目は血中コルチゾール・新版STAI・EPDS(エジンバラ抑うつ尺度)・育児動機評定尺度・夫婦関係満足度尺度で、妊娠中期・妊娠末期・産褥入院中・産後1カ月健診時の4時期に行った。京都大学医の倫理委員会の承認を得た。社会的ハイリスク妊婦は、全国日本産婦人科医会ならびに京都市保健福祉課による「乳幼児・児童虐待のリスクのある妊婦のチェックリスト項目および先行研究を参考として、「社会的ハイリスク妊婦チェックリスト」を作成して選別した。

目的3：妊婦に対する調査-前向き自作質問紙を用いたインターネット調査である(承認番号：R0673)。対象は18~49歳の妊娠中の女性1030人(30.8歳±5.0歳)である。調査項目は、基本属性、社会的支援の有無、IT端末利用状況、妊娠・出産に関する身体的・精神的・社会的側面の項目の検索・相談状況とその有用性などである。

産後1年までの母親への調査-日本国内在住の1歳未満の子どもを持つ10歳台~40歳

台の女性を対象としてWeb調査(ネット会社による委託調査)を実施した。1,030人が調査に回答した(本調査回収率66.7%)。対象者の属性として本人の年齢、居住地域、年収、仕事の有無、子ども数、末子の年齢(月齢)、同居家族、相談できる友達(ママ友)の有無、育児休業取得の有無、電子母子健康手帳の認知と使用の有無、育児サークル参加の有無の12項目を設定した。

4. 研究成果

目的1：結果-8組の夫婦にインタビューした結果、妊娠の判明やつわり、家族の死亡、引っ越しというイベントでは、夫婦の心の変化に一致が見られることが多かった。母親は自身の身体的変化、胎児や子どもに関するイベントの抽出やこれに伴う心の変化が多かったが、父親は仕事に関するイベントとそれに伴う心の変化が多く描写されていた。妻の心の大きな変化に夫が全く対応していない、またその逆も認められた。考察-視覚的に十分に認知でき夫婦が共に遭遇するイベントでは、夫婦の心の変化が一致する傾向にあった。母親は胎児の存在を直接感じ、授乳等を通して子育てに日々かかわっているため、より具体的な心の変化の描写が可能であったと考えられる。父親は、妊娠・出産を直接的に経験できず、仕事を通しての社会との関わりが継続するため、母親と異なる関心を持っていると考えられた。結論-夫婦が子どもを迎えて育てるという共通の目的に向かいながらも、別々の存在として妊娠期・分娩期・子育て期に異なる思いも抱くということが、当事者の主観的体験の結果として視覚的に証明された。家族の関係性が劇的に変化するこの時期に、助産師は夫・父親にもより注目し、妊娠・出産や子育てにどのように関わっていくかを把握して支援することの重要性が示唆された。

目的 2 : 結果 Cortisol 値の妊娠中期・末期・産褥入院中の変化では、社会的ハイリスク妊産婦群では妊娠中期から末期にかけて上昇し、末期に最大値となり、末期から産褥入院中にかけて有意に低下した ($p < 0.05$)。ローリスク群のCortisol 値は産褥入院中でも上昇したまま推移した。社会的ハイリスク妊産婦群の状態不安は、妊娠中期で有意に高値を示し ($p < 0.05$) EPDS は妊娠中期と産褥入院中で有意に高値を示した。社会的 High/Low risk 妊産婦ともに、妊産婦のストレスに関する客観的評価指標と主観的評価指標は明確な関連性は見いだせず、それぞれ独立した因子であると示唆された。psychological distress に影響する因子は、社会的ハイリスク群では中期・末期・産褥入院中の3時点で夫婦関係が有意に不良で、ローリスク群では有意に高値を示し良好であった。社会的 High/Low risk 妊産婦ともに、児に対する肯定的感情及び矛盾する感情の推移は類似していた。psychological distress と親となる発達では、ハイリスク妊産婦の中期の EPDS に、パートナーの中期の特性不安、育児動機、対児回避感情、夫婦関係満足度が影響を与えていた。

目的 3 : 妊婦調査 - 情報を検索したことがある人は 1008 人(97.9%)、ネットで相談したことがある人は 6 割であった。IT 機器ではインターネットが最も使用されており(検索 : 97.1%、相談 : 60.9%)、次いでアプリであった(検索 : 43.7%、相談 : 34.5%)。精神的側面は身体・社会的側面と比較して、肯定的評価が低かった。アプリで疑問が解消しなかったことがある人も 55.1%と過半数いた。理由は、知りたいことが出てこないが過半数を超えた(55.2%)。結論 - 妊娠・出産に関する情報にアクセスする為に、パソコン・スマホがほぼ 100%近く使用されていることが明確になった。アプリの有用性の検証の結果から、

信頼できる専門家監修である。妊娠～産後までカバーしている。時期に合わせた的確な情報が得られる。信頼できる医療者と相談できるシステムがある。病院と連携できる、というアプリが今後より良い情報提供システムを構築するうえで必要になると示唆された。

母親調査 - 母親の情報としては、産後の身体的異常の情報(乳腺炎・産後うつなど)は 78.1%と最も高率に調べていた。産後の体の変化の情報(悪露・体重・体型など)は 72%、心の変化の情報(イライラ・気分の落ち込み・不安など)は 47.1%が調べていた。また、産後の人間関係について調べた人は 481 人(52.6%)であった。

子の情報で最も高率であったのは生活(離乳食・夜泣き・指しゃぶりなど)で 81%及んだ。次いで、育児情報(授乳・ミルク・卒乳)は 78.5%、身体的異常所見(便秘や緑・皮膚トラブル・発熱など)75%を示し、母親の情報よりいずれも高率であった。

これらの成果から、妊娠期から産後までの育児支援プログラムについて考察した。

5 . 主な発表論文等

[雑誌論文](計 1 件)

椿真希子, 我部山キヨ子, 妊婦の精神的ストレスに関する生理的評価指標と心理社会的評価指標, 文献レビュー, 日本女助産学会誌, 印刷中

<http://jam2017.umin.jp/doi.org/10.3418/jam>

[学会発表](計 6 件)

Chiba Y., Takezawa M., Kabeyama K.: Use of a modified Life Interview Method for understanding continuous mental condition changes in pregnant women and mothers rearing children, ICM Asia Pacific Regional Conference 2015, 横浜

千葉葉子, 竹澤恵, 我部山キヨ子: ライフ
ライン・インタビュー法による妊娠期から産
後1年の夫婦の心の変化, 第30回日本助産
学会学術集会, 2016, 京都

椿真紀子, 我部山キヨ子: 周産期の社会的
ハイリスク妊産婦の psychological distress
と親になる発達 - パートナーを含めた社会
的ハイリスク・ローリスク妊産婦の比較 -
第30回日本助産学会学術集会, 2016, 京都

椿真紀子, 我部山キヨ子: 妊婦の精神的ス
トレスに関する Biomarker と Self-reported
psychological distress, 第30回日本助産
学会学術集会, 2016, 京都

我部山キヨ子, 松原千晴: 妊娠方法別にみ
た産後早期と産後1ヶ月における育児への自
己効力感とその影響因子 - , 第30回日本助
産学会学術集会, 2016, 京都

椿真紀子, 我部山キヨ子: 妊娠末期の社会
high/low risk 妊婦のパートナーと
psychological distress と親となる発達第
57回日本母性衛生学会学術集会 2016, 東京

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

我部山 キヨ子 (KABEYAMA, Kiyoko)
京都大学・大学院医学研究科・教授
研究者番号: 20243208

(2) 研究分担者

千葉 陽子 (CHIBA Yoko)
滋賀医科大学・医学部・非常勤講師

研究者番号: 80432318

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

椿真希子 (TSUBAKI Makiko)

京都大学大学院修士課程

松原千晴 (MATSUBARA Chiharu)

京都大学大学院修士課程